

〈教育実践研究〉

単元構造図を用いた「野外活動（ウインタースポーツ）」 における授業設計方法の提案

松元隆秀*・島典広**・梶ちか子***

1. はじめに

平成30年11月26日に中央教育審議会より、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（以下、「答申」）が発表された。答申には、これまでの大学教育における個々の教員の教育手法や研究を中心に授業を構築するシステムから脱却し、学修者が何を学び何を身に付けることができたのかを明らかにし、個々人の学修成果を可視化できる教育の必要性が記載されている¹⁾。多くの大学では、このような大学教育の質的変換を図るため、「卒業認定・学位授与の方針」（以下、「ディプロマ・ポリシー」）、「教育課程編成・実施の方針」（以下、「アドミッション・ポリシー」）を策定している²⁾。これらのポリシーにそって授業目標を適切に設定し、評価することが求められている。こうした流れの中で従来のテスト法では可視化されにくい知識構成の過程や高次のパフォーマンスを評価するための方法としてルーブリック等の評価法も注目されている³⁾。

佐藤・梶⁴⁾は体育系大学の保健体育科教育法Ⅳの授業において初等中等教育の学習指導要領に示された学修課題の体系的・系統的な実践・評価を目指して作成された「単元構造図」を活用している。また、その中で、単元構造図が授業のねらいや内容を共有することができ、大学の授業づくりやFD（ファカルティーディベロップメント）の一環としても単元構造図が有効なツールである可能性を示唆している。単元構造図は、授業内容の確認、学修課程の具体化、評価規準の設定という一連の授業づくりに必要な過程を1枚のシート上に示すことができるため、シラバスと実際の授業をつなぐことができる有効なツールとされている。しかしながら、佐藤・梶の示した大学版単元構造図には各大学が設定しているディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーが考慮されていない。一方、梶ら⁵⁾は実技科目「ダンス」の授業を対象に大学が設定するディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーから授業科目の到達目標を設定し、大学版単元構造図の作成過程を示している。

そこで、本研究では、梶らの作成した大学版単元構造図の作成方法を用いて東海学園大学スポーツ健康科学部における「野外活動（ウインタースポーツ、以下：スキー実習とする）」を対象に単元構造図を作成することを目的とした。

2. 単元構造図の作成過程

本学のカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを考慮した単元構造図の作成は梶らの示した、①授業科目の到達目標の設定、②評価規準の明確化、③授業内容の検討、学修課程の検討という作業手順で行った。なお、本研究における単元構造図の作成は、筆者と指導員の資格を有していた教員とで検討した。その後、単元構造図に関する専門家に作成手順の一連の流れと整合性について確認した上で作成した。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部、** 東海学園大学スポーツ健康科学部、*** 鹿屋体育大学

2-1 授業到達目標の設定

本学部では、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが定められている。「スキー実習」は展開科目に位置されており、教職課程科目の選択必修科目とされている。

図1には、本学部のディプロマ・ポリシーを示した。「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」の4つで構成されている。

統合的な学習経験と創造的思考力 卒業研究等の作成を通して、自らが立てた新たな課題を解決することができる		
知識・理解	汎用的技能	態度・志向性
<ol style="list-style-type: none"> 1. 競技スポーツ、健康スポーツなどの様々な側面からスポーツを体系的に理解する。 2. 保健体育教諭として、教育を取り巻く今日的諸問題に対応できる知識を身につけている。 3. スポーツ指導者として、コーチングに関する基礎的・専門的知識を体系的に身につけている。 4. 健康づくりリーダーとして、健康に関する基礎的・専門的知識を体系的に身につけている。 5. 行政、産業、環境、医学などの観点から、スポーツと健康に関する知識を身につけている。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対人関係能力及びコミュニケーション能力を身につけている（コミュニケーション・スキル）。 2. 情報通信技術を用いて、スポーツと健康づくりに関する多様な情報を収集し、スポーツ健康科学の立場から分析活用することができる（情報リテラシー・数量的スキル）。 3. スポーツと健康づくりに関する高い課題意識をもち、これらに関する知識や情報を論理的に分析し、実践的指導に役立てることができる（論理的思考力）。 4. スポーツと健康づくりに関する問題を発見するとともに、さまざまな情報に基づいて的確な判断を下し、問題を解決することができる（問題解決力）。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯の力で行き届くことができる（自己管理能力・勤快誠実）。 2. 他者から学ぶ姿勢をもち、互いに慈しみ合い、支え合い、共に生かす、仕事や研究を進めることができる（チームワーク・共生）。 3. 保健体育教諭としての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、教育や地域の発展に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。 4. スポーツ指導者としての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、競技レベルに対応した指導によって競技力の向上に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。 5. 健康づくりリーダーとしての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、健康社会の増進に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。

図1. スポーツ健康科学部における人材養成を目的としたディプロマ・ポリシー

このディプロマ・ポリシーに含まれる、「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」の3つの目的から「スキー実習」で学修が期待される能力を選択したものを図2に示した。なお、ディプロマ・ポリシーの「統合的な学習経験と創造的思考力」に関しては、卒業研究等の作成を通して学修される能力とディプロマ・ポリシーに記載があるため、今回は除外した。「知識・理解」に関しては、「(1) 競技スポーツ、健康スポーツなどの様々な側面からスキーについて理解している」「(2) スポーツ指導者として、スキーに関する基礎的・専門的知識を理解している」を到達目標として設定した。また、「汎用的技能」に関しては、「(1) 対人関係能力及びコミュニケーション能力を身につけることができる」「(2) スポーツと健康づくりに関する高い課題意識をもち、スキー指導者としての立場から学ぶことができる」「(3) スポーツと健康づくりに関する課題を発見するとともに、学んだ知識、技能を駆使して問題を解決することができる」を到達目標として設定した。「態度・志向性」に関しては、「(1) 自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯取り組むことができる」「(2) 他者から学ぶ姿勢をもち、互いに慈しみ合い、支え合い、共に生かす合っていくことができる」を到達目標とした。

知識・理解	汎用的技能	態度・志向性
<ol style="list-style-type: none"> 1. 競技スポーツ、健康スポーツなどの様々な側面からスポーツを体系的に理解する。 2. 保健体育教諭として、教育を取り巻く今日的諸問題に対応できる知識を身につけている。 3. スポーツ指導者として、コーチングに関する基礎的・専門的知識を体系的に身につけている。 4. 健康づくりリーダーとして、健康に関する基礎的・専門的知識を体系的に身につけている。 5. 行政、産業、環境、医学などの観点から、スポーツと健康に関する知識を身につけている。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対人関係能力及びコミュニケーション能力を身につけている（コミュニケーション・スキル）。 2. 情報通信技術を用いて、スポーツと健康づくりに関する多様な情報を収集し、スポーツ健康科学の立場から分析活用することができる（情報リテラシー・数量的スキル）。 3. スポーツと健康づくりに関する高い課題意識をもち、これらに関する知識や情報を論理的に分析し、実践的指導に役立てることができる（論理的思考力）。 4. スポーツと健康づくりに関する問題を発見するとともに、さまざまな情報に基づいて的確な判断を下し、問題を解決することができる（問題解決力）。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯の力で行き届くことができる（自己管理能力・勤快誠実）。 2. 他者から学ぶ姿勢をもち、互いに慈しみ合い、支え合い、共に生かす、仕事や研究を進めることができる（チームワーク・共生）。 3. 保健体育教諭としての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、教育や地域の発展に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。 4. スポーツ指導者としての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、競技レベルに対応した指導によって競技力の向上に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。 5. 健康づくりリーダーとしての倫理観・使命感・責任感を身につけるとともに、健康社会の増進に寄与・貢献することができる（倫理観・社会的責任）。
<ol style="list-style-type: none"> (1) 競技スポーツ、健康スポーツなどの様々な側面からスキーについて理解している (2) スポーツ指導者として、スキーに関する基礎的・専門的知識を理解している 	<ol style="list-style-type: none"> (1) 対人関係能力及びコミュニケーション能力を身につけることができる (2) スポーツと健康づくりに関する高い課題意識をもち、スキー指導者としての立場から学ぶことができる (3) スポーツと健康づくりに関する課題を発見するとともに、学んだ知識、技能を駆使して問題を解決することができる 	<ol style="list-style-type: none"> (1) 自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯取り組むことができる (2) 他者から学ぶ姿勢をもち、互いに慈しみ合い、支え合い、共に生かす合っていくことができる

図2. ディプロマ・ポリシーと授業到達目標の関連

2-2 評価規準の明確化

評価規準については、到達目標の内容を踏まえつつ、作成した（図3）。まず、「知識・理解」の到達目標より、4つの評価規準を作成した。「理解」の内容として「①スキー技術の特性を理解している」を設定し、「知識」の内容として「②雪山の特殊環境について理解している」、「③スキー競技の傷害について理解している」、「④スキーに用いる道具について理解している」の3つを設定した。次に「汎用的技能」については、到達目標に記載した内容より、「指導」、「課題発見および問題の解決」、「コミュニケーション能力」をキーワードとして4つの評価規準を作成した。まず、「指導」の内容として「①スキー用具の使い方および安全への配慮ができる」、「②スキー技術の基礎となる滑りを行うことができる（1）スキーの基礎技術であるブルークやパラレルで滑ることができる（2）ブルークもしくはパラレルで大回り、中回り、小回りを行うことができる」を設定した。次に「課題発見および問題の解決」の内容として、「③班員と問題を共有し、技術的な課題を解決できる」を設定した。最後に「コミュニケーション能力」として、「④学んだ知識・技術を用いて教え合いが出来ている」を設定した。「態度・志向性」については、「①ペアやグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に積極的に取り組もうとする」、「②他者を評価し、称賛を送ろうとする」を設定した。

単元名 指導内容の概要	野外活動（ウインタースポーツ）		評価方法
	授業の到達目標	評価規準	
教育現場における保健体育教員あるいはスポーツ指導者としての指導能力向上を目的とする。また、冬季山岳の雄大な自然の魅力を体感すると共に、自然環境の厳しさを体験し、スキー場での安全管理、集団行動や生活に関する指導者としての心構えを体得する。	知識・理解	(1)競技スポーツ、健康スポーツなどの様々な側面からスキーについて理解している。 (2)スポーツ指導者として、スキーに関する基礎的・専門的知識を理解している。	知識・理解（～している）15%
			①スキー技術の特性を理解している。
			②雪山の特殊環境について理解している。
			③スキー競技の傷害について理解している。
	汎用的技能	(1)スポーツと健康づくりに関する課題を発見するとともに、学んだ知識、技能を駆使して問題を解決することができる。 (2)スポーツと健康づくりに関する高い課題意識をもち、スキー指導者としての立場から学ぶことができる。 (3)対人関係能力及びコミュニケーション能力を身につけることができる。	汎用的技能（～している、～できる）65%
			①スキー用具の使い方および安全への配慮ができる。
			②スキー技術の基礎となる滑りを行うことができる。 (1)スキーの基礎技術であるブルークやパラレルで滑ることができる (2)ブルークもしくはパラレルで大回り、中回り、小回りを行うことができる
			③班員と問題を共有し、技術的な課題を解決できる。
			④学んだ知識・技術を用いて教え合いが出来ている。
	態度・志向性	(1)自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯取り組むことができる。 (2)他者から学ぶ姿勢をもち、互いに慈しみ合い、支え合い、共に生かし合っていくことができる。	態度・志向性（～しようとする）20%
①ペアやグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に積極的に取り組もうとする。 ②他者を評価し、称賛を送ろうとする。			

図3. 「野外活動（ウインタースポーツ）」の授業到達目標及び評価規準

2-3 学修過程および学修内容と学修活動の検討

まず、図4の上部に15回の学修過程を作成した。その後、作成した学修過程をもとに学修内容^(注1)と学修活動^(注2)を作成した。本学のスキー実習は1～3回目を大学内での事前講義、4～15回目を実習地での実践学習および実技テストとして開設している。

具体的な学修内容として、「知識・理解」については、実習前の1～3回目の講義にてスキーにおけるスポーツ傷害、雪山の環境特性、スキーの道具の名称や取扱についての理解とし、3回目の講義にて小テストを行うこととした。ただし、スキーの技術特性に関しては実際にスキー技術について指導を行うため実習期間に組み込んだ。「汎用的技能」および「態度・志向性」については、4～15回目の実習期間で評価をすることとした。

本学のスキー実習は3泊4日で行われ、現地で実習を行う期間は1日目の午後、2日目と3日目の午前と午後に班ごとに実習を行い、4日目の午前中に実技のテスト行う。また、宿泊先にて1日目の夜間に班ごとに90分間の指導の時間が設けられている。対象となる学生のレベルは初心者からスキー検定取得者までであり、また、班を持つ教員についてもスキーを専門的に学んでいない者からスキー検定1

級取得者と幅広い。そのため、単元構造図では指導実技の内容に幅を持たせ、班の担当教員が学生のレベルに応じて対応しやすいように配慮した。1日目には学修内容として、スキー道具の使用方法や安全管理やスキー技術の基礎についての指導内容を設定した。2日目から3日目については、担当班の学生のレベルによって異なるため、単元構造図の学修内容を元にレベルに応じた学修活動を行う。また、2日目から3日目に関してはアクティブ・ラーニングの一環として学生達自身に滑りの評価を行わせるためペア学習を学修活動としてとり入れた。

学修内容と学修活動の下部には評価のタイミングを記載している。しかし、評価のタイミングについては多くの教員が指導を行うスキー実習の特性上、事前の講義および実技テストの評価以外については、各教員の指導内容や学生のレベルによって左右されることが考えられる。そのため、必ずしもこのタイミングで行う必要はないということを教員間で共有した。

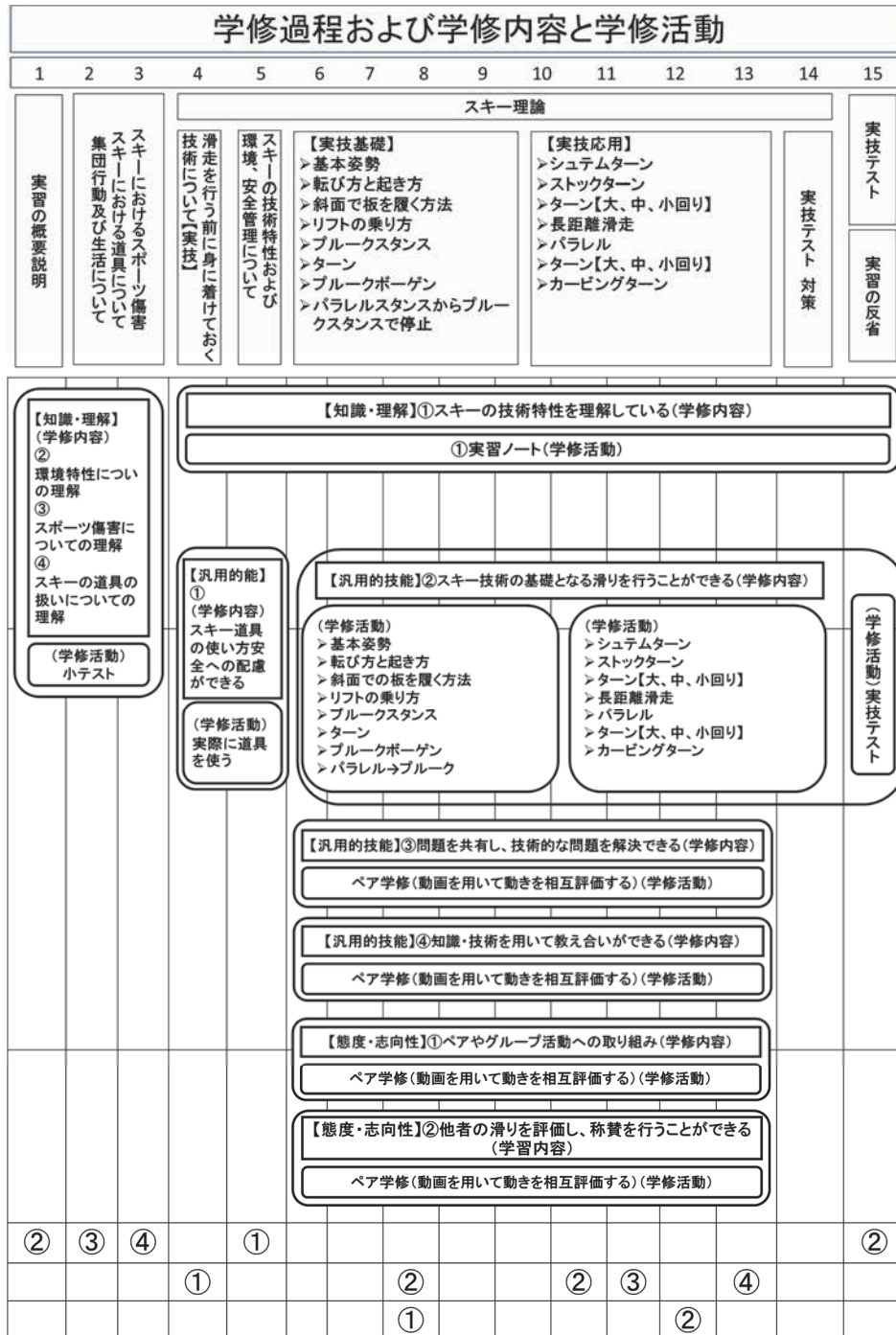


図4. 「野外活動(ウインタースポーツ)」の学修過程および学修内容と学修活動

3. 実習ノートについて

これまで、本学のスキー実習では、実習ノートを用いて学生にその日の学習内容^(注3)や感想などを記入させていた。これはA4用紙1枚に午前と午後の学習内容と感想を書かせるという内容で、記述するスペースが多く、学生は文章を長く記述することに囚われてしまい、学習内容と感想が重複してしまうこともあった。また、評価を行う教員も膨大な量の文章を評価するため、評価規準や判断基準に共通性が見られない可能性が考えられた。

そのため、実習ノートの内容についても単元構造図の評価規準および学修内容に合わせて修正した。図5は、実習1日目の実習ノートである。ここでは、その日の学習内容に加えて実習全体を通して、どのような目標を持って過ごすのかを記述させる。学習内容の記述については、専門的な知識および専門用語を用いて書くように指示しており、学生が評価規準に即した知識を獲得できているか確認する。また、学生に実習を通しての目標を記述させることで、学生は自身の目標を可視化でき、担当教員もその目標を達成するための行動ができているのか評価することができる。実習ノート下部の質問項目については、学生視点では自身の活動を振り返り、可視化できることをねらいとしている。また、教員視点では、実習中の観察評価の手助けとなり、今後の指導方針の参考として用いることを意図している。図6は、2日目～3日目の実習ノートである。学習内容および質問項目については1日目と同様である。ここでは、アクティブ・ラーニングの一環として用いたペア学習について自身の滑りの評価と他者の滑りの評価を記述する。これは、実技学習の時間中にペアになった相手学生の滑走の撮影動画を視聴し、相互評価・指導させる取り組みである。これは、評価規準の「汎用的技能」と「態度・志向性」と関連している。図7は、最終日の実技テスト後に学生に記述させるものである。ここでは、学生が1日目に記述した目標について実習を通して達成することができたのか可視化して確認を行う。

実習ノート

月 日 ()	天気 ()	体調 <input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 不良 ()
<p style="text-align: center;">学習内容</p> <p>* 学習内容については、付属の用語一覧、道具一覧を参考に専門用語を用いて書くこと*</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">午後</div>	

2日目～4日目に向けてどのような目標を持って実習を過ごすのか記述してください。

* (実習へ向けての姿勢や態度、スキー技術の獲得、班員や教員とのコミュニケーションなどについてどのように行っていくのか記述する) *

本日の実習について質問します。下の1～6の質問について該当する箇所に○をつけてください。

	良くてできた	できた	あまりできなかった	できない
1. スキーの基礎知識・専門知識を学ぶことができましたか？				
2. 今までできなかったことが出来るようになりましたか？				
3. 友達と教え合ったり、助けたりしましたか？				
4. 今日の実習を通して自身の滑りについて課題を発見することができましたか？				
5. 自分から進んで学習することができましたか？				
	うまくできる	できる	あまりできそうにない	できそうにない
6. 今日学んだことを実際に指導者として指導することはできますか？				

図5. 実習ノート「野外活動（ウインタースポーツ）」1日目

実習ノート

月 日 ()	天気 ()	体調 <input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 不良 ()
学習内容 <small>* 学習内容については、付属の用語一覧、道具一覧を参考に専門用語を用いて書くこと*</small>	午前	
	午後	

ペアを撮影して、5段階で評価し、その理由と今後に向けてアドバイスしてみよう。
5段階評価は【1】が最も高く、【5】が最も低いものとする。

ス キ ー 技 術	2日目【自己評価】	2日目【ペア評価】
	評価： 1・2・3・4・5	評価： 1・2・3・4・5
	評価の理由とアドバイス	評価の理由とアドバイス

本日の実習について質問します。下の1～6の質問について該当する箇所には○をつけてください。

	良くできた	できた	あまりできな かった	できない
1. スキーの基礎知識・専門知識を学ぶことができましたか？				
2. 今までできなかったことが出来るようになりましたか？				
3. 友達と教え合ったり、助けたりしましたか？				
4. 今日の実習を通して自身の滑りについて課題を発見することができましたか？				
5. 自分から進んで学習することができましたか？				
	うまくできる	できる	あまりできそ うにない	できそうにない
6. 今日学んだことを実際に指導者として指導することはできますか？				

図6. 実習ノート「野外活動（ウインタースポーツ）」2～3日目

実習のふりかえり

今回の実習について下記の項目に教えてください。

(1) 実習1日目に作成した目標を達成することができましたか？
該当する数字に○をつけてください。

- ① 多くの目標を達成できた ② 一部の目標は達成できた
③ あまり目標を達成できなかった ④ ほとんど達成できなかった

(2) その中で特に達成できたことと達成できなかったことについて記述してください。
また、その理由も記述してください。

【達成できたこと】

【達成できなかったこと】

(3) 今回の実習を通して、下記の項目より、自身が力を注いだと思うものを3つ選択し、
最も力を注いだものには【1】を2番目に力を注いだものには【2】を3番目に力を注いだ
ものには【3】をつけてください。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 【 】 スキー技術の獲得 | 【 】 スキーについての知識 |
| 【 】 スキーの指導力の獲得 | 【 】 授業への態度・姿勢 |
| 【 】 班員、友人への指導(教え合い) | 【 】 仲間とのコミュニケーション |

図7. 実習ノート「野外活動（ウインタースポーツ）」4日目

4. 評価方法および判定基準（ルーブリック）の作成

最後に評価方法および判定基準の作成を検討した。評価方法については、1～3回目の講義の3回目の講義の最後に小テストを実施し「知識・理解」についての評価をする（15点満点）。次に実習における「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」については、各班の担当教員による観察評価（15点満点）、実習ノートの内容（20点満点）を10段階（3.5×段階）で評価を行う（35点満点）。最終日の実技テストについては、スピード、スキー板のコントロール、ターン弧の形、リズムのある滑降の項目より、実施できている技術に応じて採点する（45点満点）。また、以下の5項目（スピードコントロールが出来ている、綺麗なターン弧が描けている、斜面に適したエッジングを行える、斜面をリズムよく滑降できている、基本姿勢が最初から最後までとれている）を達成していたら各項目につき1点加点をする。加えて、経験者と未経験者の公平性を保つため経験者については実技の得点に0.9をかけたものを総合得点とした（経験者：実技得点45点×0.9＝40.5、5つの項目達成で加点5点、40.5＋5＝45.5、小数点以下切り捨てで45点となる）。また、最終日に提出する実習ノートの内容に5点を割り振った。

図8は、判定項目および判定基準を示したものである。各項目をA、B、C評価の3段階で判定基準を設定した。「知識・理解」は小テストおよび実習ノートの記述、「汎用的技能」は、スキー技術に関連する項目および実習の取り組み、「態度・志向性」には実習の取り組みおよび実習ノートからそれぞれ判断し、それぞれ3段階で評価をすることとした。

		判定基準		
		A	B	C
知識・理解	①スキー技術の特性を理解している	具体的な滑りに触れながらスキーの技術特性について記載している	スキーの技術特性について記載している	スキーの技術特性について記載していない
	②雪山の特殊環境について理解している	雪山の特殊環境について具体例をあげて記載している	雪山の特殊環境について記載している	雪山の特殊環境について記載していない
	③スキー競技の傷害について理解している	スキー競技の傷害について具体例を挙げながらどのような傷害が起こるのか記載している	スキー競技の傷害について記載している	スキー競技の傷害について記載していない
	④スキーに用いる道具について理解している	スキーに用いる用具について注意点など加味しながら記載している	スキー用具について記載している	スキー用具について記載されていない
汎用的技能	①スキー用具の使い方および安全への配慮ができる	実技を通してスキー用具が正しく管理されており、安全を考慮した扱いができています	スキー用具の扱いおよび安全面の考慮のどちらかはできている	スキー用具の使い方および安全面が考慮できていない
	②スキー技術の基礎となる滑りを行うことができる。(1)スキーの基礎技術であるブルークムやパラレルで滑ることができる(2)ブルークムもしくはパラレルで大回り、中回り、小回りを行うことができる	ブルークムもしくはパラレルの形で一定のリズム、弧の大きさを保ちながら大回り、中回り、小回りを行うことができる	ブルークムもしくはパラレルの形で一定のリズムで大回り、中回り、小回りを行うことができる	ブルークムもしくはパラレルの形で滑降することができない
	③班員と問題を共有し、技術的な課題を解決できる。	班員と問題を共有し、解決のための具体的な方法が提案できる	班員と問題を共有し、技術的な課題を解決しようと努めている	班員と問題の共有ができていない
	④学んだ知識・技術を用いて教え合いが出来る	講義・実技で学んだ方法をお互いしっかりと教え合うことができる	講義・実技で学んだ方法を相手に伝えようと努めている	講義・実技で学んだ内容について教え合いができていない
態度・志向性	①ペア活動やグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に積極的に取り組もうとする	ペア活動やグループ活動を通して、自ら進んで取り組んだり、集中して取り組むことができる	ペア活動やグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組んでいる	ペア活動やグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組んでいない
	②他者を評価し、称賛を送ろうとする	他者の滑りに集中して観察を行い、具体的なアドバイスや評価を行うことができる	他者の滑りに対して、評価を行うことができる	他者の滑りを評価することができない

図8. 「野外活動（ウインタースポーツ）」の判定基準

5. まとめ

本研究では、「野外活動（ウインタースポーツ）」における大学版単元構造図を作成した（図9）。これまで、大学の野外活動を対象に単元構造図を作成する試みは筆者の知る限りない。体育系大学で行われるスキー実習は多くの教員が関わる授業であり、指導の方法や学生の評価については班の担当教員に一任もしくは、実技テストによる直接評価で判断することが多い。しかし、単元構造図を用いることで、到達目標、評価規準、授業内容、判定基準などを教員間で共有することができ、教員間の評価の差をできる限りなくし、学生等の評価をより均一化することができると考えられる。また、単元構造図の作成に伴い、授業内容を明確にすることで実習ノート等も整理することができた。このため学生等は、より学修成果を可視化することができるようになったと考えられる。

松下⁶⁾は、学習者を評価する際は直接評価と間接評価を併用して用いることの必要性を説いている。間接評価では、「ダニング=クルーガー効果」により、能力の低い人は自身を過大評価し、能力の高い人は自身を控えめに評価する傾向がある⁷⁾と指摘されている。そのため、自己報告による間接評価だけでは評価ができない。一方、直接評価だけでは、学修成果に至る行動などを評価することができない。本研究では、実習中の観察評価および実技テストを直接評価とし、実習ノートを間接評価として併用するため評価の方法として妥当であると考えられる。

以上の点から、「野外活動（ウインタースポーツ）」においても単元構造図を用いて授業の設計を行うことは学生の学修成果の可視化およびディプロマ・ポリシーを反映させた授業内容の作成を行うツールとして有用だと考えられる。今後は、実習のデータを蓄積し、学生等にどのような学修成果を与えることができるのか検討していきたい。

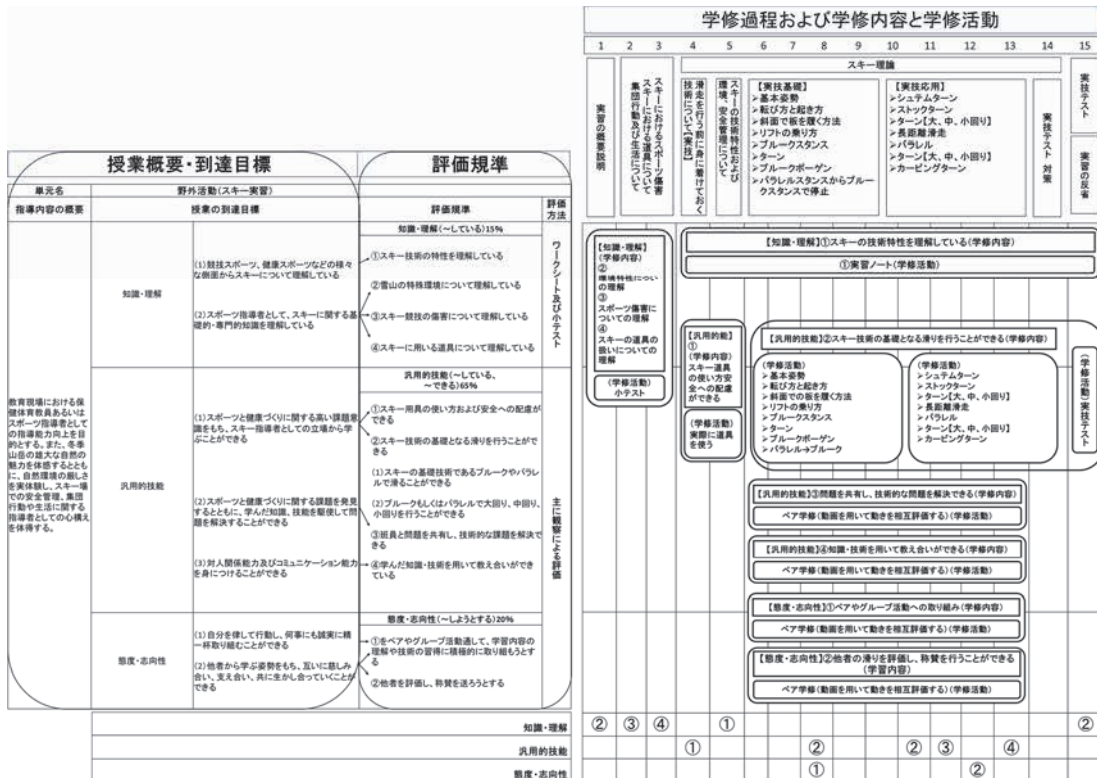


図9. 「野外活動（ウインタースポーツ）」の単元構造図（全体版）

注および引用参考文献

- 1) 中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」
- 2) 中央教育審議会（2016）「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受け入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン
- 3) 山田嘉徳，森朋子，毛利美穂，岩崎千晶，田中俊也（2015）学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討．関西大学高等教育研究，6，21-30.
- 4) 佐藤豊，梶ちか子（2014）単元構造図，模擬授業，映像視聴の連続体験による 体育科教員養成授業モデルの検討－鹿屋体育大学における 2013 年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察から－．鹿屋体育大学学術紀要，51，11-24.
- 5) 梶ちか子，松元隆秀，佐藤豊，金高宏文（2019）大学教育における単元構造図を用いた授業設計方法の提案－体育系大学における「ダンス」の実技授業を例として－．鹿屋体育大学学術紀要，57，17-28.
- 6) 松下佳代（2019）学習成果とその可視化．高等教育研究，20，93-112.
- 7) Kruger J, Dunning D. (1999) Unskilled and unaware of it: how difficulties in recognizing one's own incompetence lead to inflated self-assessments. J Pers Soc Psychol, 77 (6), 1121-1134.

(注1) 学修内容：本研究における「学修内容」は，指導と評価の一体化の観点に基づき，評価規準に示したものとした。

(注2) 学修活動：本研究における「学修活動」は「学修内容」に示した項目を達成するために授業内で行う活動とした。

(注3) 学習内容：本研究の実習ノートではその日に学習した内容を記載させるため，「学修内容」ではなく，「学習内容」という語で示した。